

○ 日本造園公団 正会員 吉村雅宏
 東京工業大学 " 石田東生
 東京大学 学生員 野田陽一

図 はじめに; 現在、緑に関する問題は多くの人の関心事として論議されている。これを市街地の緑としての問題に限るなら、その重要性は精神的な意味での健康的、文化的な環境を作るものとして人々に受け入れられることであろう。それは多くの場合、リクリエーションを目的とした公園緑地や信仰を目的とした寺社の樹木、文化財保存のための緑地が対象となる。それは割合整備され、人々に意識されやすい緑である。しかし本論文で以上のような意味では意識されにくく、破壊という危険性を伴った放置されやすい斜面緑地に焦点を当てた。そこで人々、それとどう評価するかを分析し、何が評価を決める要素になっているのか、またどういった評価する要素を変えることにより、斜面緑地の環境を向上させることに役立つようになるのかを本論文で明らかにしようとするものである。本論文の構成は3部からなり、1一般性を与えるための斜面緑地の分類、2その評価3評価の物理的要素の分析である。

図 分類; 斜面の撮影スライド147枚から似ていると思われるものを除き45枚を選定し、25名の被験者によりイメージする分類を試みた。これは、このスライドを個人の判断で分類してもらい、25人による分類をデータとして統計的処理を施して分類する方法である。今45枚のスライドのうち、任意の一枚のスライドを考慮する。25人のうち何人か同じグループにその一枚を入れたかを知ることである。この回数は一対のスライド間の親近性を表わす指標として扱える。こうしてすべてのスライド間の親近性を求め、数量化されたスライド間の内的位置関係を二次元平面上にプロットしてみた。これをスライドを参照しながら独自の判断でグループ分けしてみた(Fig 1)。分類は3グループに分け、1コンクリート、モルタルの急斜面、4グリーンベルト的タイプ、6公園的タイプ、8雑木と雑草による緩山のタイプの4タイプで、その他はこれらのタイプの中間的タイプと考えられる。

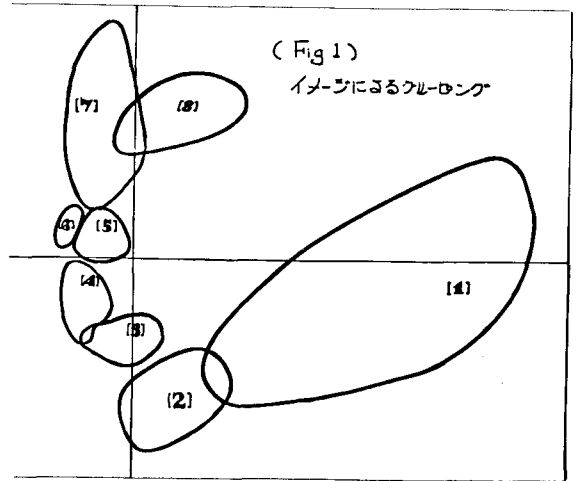


図 評価; 「好き嫌い—好きくない」を総合評価とし、他に7組の形容詞対を用いてSD法によるスライド実像を試みた。被験者は36名で、7件をそれぞれ判断してもらった。総合評価に1~7点の得点を与え、その平均値をスライドに与えこれを斜面の評価値とし、他の形容詞対による平均値との相関係数を求めた(表1)。表1から「安全性」と「好き嫌い」は特に相関が高く、「圧迫感」「ゆるやかなさ」の評価も考え合わせれば、斜面における不安感が「好き嫌い」に高きといえることわかる。また「好き嫌い—好きくない」の得点をFig1で求めた3グループそれぞれをプロットしてみた。(詳しくは講義中に説明)このプロットした図において1,2,4,6,8軸で①印のスライドを省けば良くとされている。3,5軸の中間的要素を多く含んでいるため評価が分かれたと推察される。

(表 1)

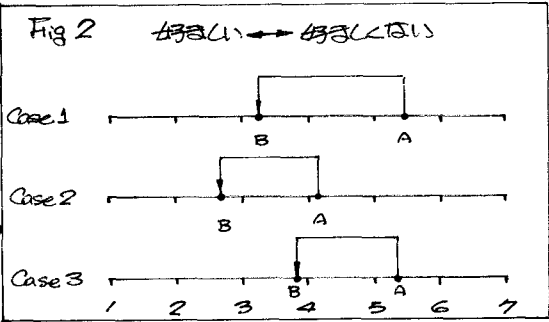
		総合評価との相関係数
安全性	←→ 危険性	0.95
開放感 の強さ	←→ 圧迫感 の強さ	0.91
ゆるやかなさ	←→ 急さ	0.89
きれい	←→ 汚い	0.87
小さい	←→ 大きい	0.63
自然な	←→ 人工的	0.36
変化が激しい	←→ 単調	0.05

自ら評価軸の一端から飛び出たEの印のセンターは分類としては同じグループに属するものの、急斜面下に人家があったり、廃棄物が散乱してあったり、土留に不安があったりする等、形態を分類することは別に特に評価と著しと要素があったためであると推察される。その要因の分析は次の項に譲る。(表2)

図 要因の分析【操作的要因・非操作的要因】—斜面形成の要因と、地視、土留、廃棄物等は操作的要因、また斜面の傾斜、高さ、土留の是非操作的要因とに分けた。全スライドの中から非操作的要因は同じで、操作的要因は違うと思

Case1	A	B	Case2	A	B
葎状の雑草有り	雑草無し	雑草無し	葎状の雑草有り	雑草無し	雑草無し
廃棄物有り	廃棄物無し	廃棄物無し	雑木林	松の植林	松の植林
低木無し	低木有り	低木有り	下草有り	下草有り	下草有り
下草有り	下草無し	下草無し			
			Case3	A	B
			フェリスル塊付		葎状の雑草

われるものを3つ並べ(表2)前と同じスライド実験を施し、その傾斜の変化を図った。(Fig 2)この結果から地視が緑を被り、廃棄物が放置されていなければ、つまり特に評価と著しとよる要因がなければ、評価は中間的な所に位置し、それ以上の評価を得るためには、植樹、下草の整備等の努力が必要であることとなる。



【評価と物理的要因の結びつき】—ここでは、それと

れのスライドの総合評価値以外の基準として、11項目のスライド構成要因を考へ(表3)数量化し、物理的要因の規定力の大きさを解明しようとした。表3の上から順に1から10まで求めた規定力の大きさの順位を示している。ここで土地利用に関する要因は当初の予想よりかなり上位にあって、斜面を見れば、斜面そのものより、それを含めた空間として構えていることとなる。また緑量の規定力が高いことは、緑なる何れもそれは最速の向上に役立とうというわけでもないことと示していると思われる。

順位	(表3) 斜面の構成要因	
1	地視	植生及びフェリスル、コンクリート
1	傾斜地面の見え	足踏み入れやいか否かに関する要因
2	斜面下の土地利用	人家、公園、河川、道路に関する要因
3	角度	斜面の水平と垂直の傾斜角度
4	土留の植樹	土留の構成要因
5	斜面上の土地利用	スライド中に覆われる斜面上方の要因
6	緑量	スライド中の斜面に占める緑の割合
7	道路横断面構成	車道の車線数及び歩道の有無
8	空の量	スライド中に空の占める割合
9	斜面の高さ	りの長さ
10	土留占有の割合	斜面における土留占有の割合

図 結論と今後の課題;以上からこのようなことが理解出来る。評価には「覚悟」という不安感や心理的に強く影響している。土地利用の規定力がかなり大きかったわけであるが、その中で特に急斜面下に人家の存在が認められる場合、そのために評価がかなり下がっている。今後丘陵地の開発をするような場合には、その斜面を占有する空間として斜面の緑地と計画しなればならない。手元で『好ましい—好ましくない』という評価で中間的な位置から好ましいという方へ高めるには、植木の植え替えと下草の整備とね、かなりの努力を必要とするのに対して、あまり好ましくない斜面傾地では、廃棄物を取り除いたり、下草を少し刈ってやったりという前に比べてさほどの努力を払って中間的な位置で上れることから、効率的に考えるならば評価の低い斜面を中心にもと加えてやり、また市街地で良く目立つようなポイントで植生、土留などの工事を実施してやるのが望ましいと考える。

今後の課題としては、斜面緑地が市街地を構成する一つの景観として捕らえるよう研究を進める方向に替って行くべき。